
金ファン番外～それもまた他愛無い日常～

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金ファン番外～それもまた他愛無い日常～

【Zコード】

Z0490

【作者名】

コニ・タン

【あらすじ】

その日、山上鳥本は軽い足取りで喫茶店へと向かっていた。仕事が早く終わり、好物のケーキを食べようと意気込んでいたのだ。だが道中で行き倒れを見つけ　?

正体不明先生作「金持ちはファンタジー！」の番外編、コニ・タン
ティストでお送りします、そんな企画作。

(前書き)

このお話は正体不明先生の「金持ちはファンタジー！」の番外という位置づけになっています。そちらを読んでいないと理解できない物語なので、ご了承下さい。

空が光っていた。星が落ちてきただんじやないかつて思つほど、綺麗で眩しい光が目を焼いていく。

私は獣、道化者。頑張つて、結局何も手に入らなかつた道化者。何でこんな事をやりたかったのか分からぬ、でもやり遂げた。でもでも、世界は何も変わらない。

腹が立つ、憎んでいる。自分になのか他人になのか分からぬ。ああ、このままだとまた何か殺してしまいそう。

多分、私はこれで死ぬんだろう。

だから最後に一言、遺言でも残しておこうか。

「金持ちは、嫌いだ」

* * *

その日、山上財閥のトップである高校生、山上 鳥本は一人で喫茶店「アナザー」に向かっていた。その日の仕事はある程度終わつたので、息抜きの為に好物のケーキを食べに来たのだった。

「ふう……やはり、たまにはゆつくりするのもいいな

女性のような柔らかな顔に微かに微笑みを浮かべ、比較的軽い足取りで喫茶店へと向かう。普段の彼を知る人間ならば軽く引くぐらいいの気の抜きつぶりである。食べ物の魔力は恐ろしい。

「ん……？」

と、軽やかだった歩みが急に止まる。眉は怪訝そうなハの字へ、

口からは声が漏れる。視線は田の前へ、田の前で倒れているソレへと向けられていた。

和服だった、『ご丁寧に履いているのは草履だ。うつ伏せに倒れており、手入れをしているようには見えない長い髪が背まで覆い隠している。それ故に顔が見えず、男か女かも判別できない。まつたく状況が分からず、困惑する鳥本だった。

「がつがつはぐはぐもしゃもしゃんぐ！　がー！　美味しい！　五臓六腑が死に絶える！」

「死に絶えてどうする」

喫茶店アナザーの席の一つ、そこで鳥本と和服は向かい合っていた。あの後、急に「は、腹が減ってインザヘヴン……！」などとよく分からぬ事を言い出したので、とりあえず食事をとらせる事にしたのだ。何者であろうと、対応するのはこの後で問題は無い。

和服　凛々しい顔つきだが、おそらくは女。胸がある　は凄まじい食いつぶりだった。金の心配はまったく要らないが、ここまでテーブルに並べている姿は田を引きすぎぎる。

「まったく、ここは特別な空間だからあまり目立ちたくないんだが」

そういう鳥本も、ケーキの皿を100は積み上げていた。二人の食事の終わるタイミングはほぼ同時だ。

「紅茶一升……トモ、その子誰？」

「『厄介事』だよ」

店員が運んできた紅茶のカップを傾けながら、その店員と軽い問答をする鳥本。知り合いなのだが、何なのか分かっていない和服女は対面で勢よく紅茶を飲み干している。熱々なのに。

とりあえずは落ち着いた所で、まず口を開いたのは鳥本だった。

「とりあえず、だ。お前の素性を聞きたい。名前は？ 肩書きは？ そもそも、この世界の人間か？」

喫茶店アナザー、ここは名前通り「異世界の人間」が頻繁に現れる場所もある。鳥本が懸念するのは「異世界の人間」である可能性であり、もしそうだとするのなら少し厄介な事になるかもしれない。

しかし和服女は、至極眞面目な顔を傾けて唸つた。

「ん……コノセカイって何だか知らないから、それは明言できなイツス。肩書きは何だろ……あ、刀持ってるんですよ刀！ だから武士！ 名前は……えーと、どうしよう。武士子でいいや」

いきなり袖口から小刀を取り出し、ブンブン振り回す和服女。鞘に仕舞つてあるとはいえ危ない というより、あまりにもツッコミ所の多い自己紹介だった。

さつきの和服女と同じように首を傾げながら、しかし口元を苦笑いの形にして鳥本は問う。

「あー……つまり何なんだ？ 自分の状況を一言で説明してくれ

男らしい顔に眩しいばかりの笑みを浮かべ、ピースサイン付きで、女は威勢よく声を張り上げた。

「記憶喪失！」

* * *

四葉 緑はメイド長である。その優秀な能力により鳥本邸を裏で支え、腹黒さにより裏で操る最強のメイドさんである。

「また増えるんですか……」

そのメイドさんが、少々疲れた顔で日の前の光景を主である鳥本が和服の女を引っ張っている光景を見つめている。鳥本は和服女に襟首をつかみながら答える。

「いわするのが最善なんだ……かくかくしかじかでな

「なるほど……かくかくしかじかなら仕方ないです」

「メーティ補正により、端的に伝わる一人であつた。

「ねーねー、『増える』ってどういう事ツスか、旦那あ？」

掴まれたまま、和服女は鳥本に質問をする。

「旦那つて俺の事か……いや、言つただろう、とりあえずお前を居候にする。ここにはもう居候が何十万と居るしな」

「へー、一世帯住まつて奴ですね、旦那

ツツコむのも疲れるので流す鳥本。元々ツツコ専門じやないのだ付き合つていられないのだ。そんなこんなでとりあえず和服女を

解放すると、一目散に縁の前へと走つていった。

「はじめまして、私は武士子ッス！」

名前はそれで確定なのか、とポソリとシッコむ鳥本だった。
その挨拶を受けた縁は、作法に則つた綺麗な礼をして答える。

「初めまして、武士子様。私は山上家のメイド長の四葉 縁です」

「メイドー？ 地獄の番人とかそういう系の役柄の人ー？」

「基本的なネタですね」

前にもこんな事あつたなーと思いながら一人の様子を見ている鳥本。和服女改め武士子は明るいし最低限の挨拶も出来るようだし、馴染めない事もないだろつ。

とりあえず居候させたとしても大丈夫そうだ、と判断しながら一人に背を向ける。

「縁、空いている部屋に案内してやつてくれ

「はい、分かりました……って、鳥本様はどうちらへ？」

首を傾げる縁を振り返り返りもせずに、鳥本は歩き続ける。疲れたようには、考え込むように眉間にしわを刻みながら。

「少し調べ物だ」

「う、ううううう…… 酷い酷い酷いツス誘つておいて放置するなんてグレますグレしてやります」

「まあまあ」

数分後の廊下には、涙目になつてている武士子の頭を撫でて慰めている縁の姿があった。それでも実は後ろから押して強制的に歩かせている辺り、それなりに容赦がない。

これからどうしようか、縁は考える。空いている部屋とだけ言つたからには自分に任せらんだらうけど、それにしたつてまずは何人かに紹介しないと生活はままならない。この子の面倒を上手く見てあげられそうな居候は……

と、そこまで考えた所で、大地を揺らすよつた強烈な音が響いた。

「……てへ」

さつきまで泣いていたのに、今度は照れたように頬を染める武士子。さつきのはお腹の音である。

「お腹空いたんですね？」

喫茶店で食べてきたと鳥本に聞いている縁は呆れ顔だ。それでも頭をかきながら「少し……」と愛想笑いしているのだから、「冗談と言つわけではないだろ？」「冗談でお腹は鳴らせないのだし。

仕方ないですね、と溜め息をつきたまた近くにあつた食堂を田指す。

「そういえば、記憶喪失だと聞きましたが……」

「ん、そーなんツスよ。なーんにも思い出せないで困つてて

肩を竦める武士子。「口口口」と表情が変わるな、という感想を抱きながらも観察を続ける。まずは肌の色、白人かもしけないがほぼ間違いなく黄色人種。服装も合わせて考えて、異世界だとしても「日本的な世界」だろうと思つ。

言葉遣いは妙だが、妙で居られると言つ事はあまりそういう事に制限のない暮らしだつたんだろう。小刀を持ち歩いてると言つ事は護身用に持ち歩くような環境に居たからだろうか、それとも趣味や骨董の類だろうか。

考へても分からない、やっぱり情報が不足している。あれこれ考へている内に食堂に着いてしまった。

「つおーー！ 良い匂いつす、画龍点睛ー！」

「その四文字熟語は何の関係もありませんけど…………」

物珍しそうに首を巡らせる武士子。

「新しいお客様です、料理大臣！」「今日は料理仙人じゃと言つておるであらうが」

調理場で珍妙なやり取りが繰り広げられているが、武士子はそつちよりも料理の匂いが気になるようだ。目を閉じて鼻をひくつかせている、意地汚さ全開である。

そして匂いを察知したのか、いきなり走り出す武士子。慌てて袖を掴もうとするが、すぐに振り払われ 慣れた動作だ、やはりあまり良い環境じゃなかつた？ 一直線にそのテーブルを田指す。本当に一直線だ、椅子やテーブルの上を猿みた的に跳ね回つている。なんていうかもう、動物にしか見えなくなってきた縁である。

その目的地 目の前の皿に手をつけ始めていた一人は、それぞ

れ違つ反応をした。かたや驚きに目を見開き、かたや落ち着きながら右手でパスタを食べ、左手で何かの機械を操作する。

すると、なんかう女の子というか人間に見えない表情で料理を奪おうとしていた武士子の顔に、拳がめり込んだ。まだ二メートルも離れているのに……という疑問は、初めから一人の正体を知っている縁にはありえなかつた。

「ロケットパンチ推進力アップバージョン、成功！」

「頼むから私の知らない間に改造しないでくれ……」

「コントのようにスローモーションで倒れる武士子。鼻血が流れて白田を剥いていて、もう田を背けて上げたくなる無様さだつた。

「ああもつ、問題ばつかり起こして……」

武士子になのか居候全体にかそれとも両方か、本人にしか分かない愚痴を零してそちらに近づいていく縁。食事を取つていた二人も、縁に気づいて挨拶をする。

「あ、縁さんだ、やほー」「どうも、縁さん……といひでコイツはなんだ？」

金髪ツインテールの女の子と、その隣の女の子。その二人組に頭を下げながら、皿のパスタを一本拝借する。そのまま武士子の口に運ぶと、ずるずる吸い込みながら意識を取り戻した。扱いが動物以下である。

「ん……あれー？ 私はいつー？ ジーはだれー？ 今はどーー？」

「一個付け足してもベタな事は変わりませんよ。ほら、立ち上がりて挨拶しましょう」

頭を振つて唸る武士子の鼻血を拭いてあげながら（ハンカチ常備はメイドの嗜み）、背中を叩いてちゃんと立たせてあげる。しばらくふらふらしていたが、ようやく田の前に人がいることに気付いたのか、きつちりと頭を下げる。

「初めまして！自分、新しい居候の武士子つス！」

「はじめまして。私は洞崎 美緒。よろしくーーー」

金髪ツインテール 美緒は普通に挨拶を交わしているが、もう一人はピンク色のカバでも見ていくよつた田で武士子を観察する。初っ端からあれだから仕方ないけど。

「あつちは虹広 真遊ね」

黙つている内に美緒に紹介されて、もう一人 真遊は不機嫌そうに顔をしかめた。「こんなと関わりたくない」オーラが出ていた。でも武士子は気にせず「よろしくっすー」と声をかける。無視されるけど。

「……む、無視されたあーー？」

「だいじょーぶだいじょーぶ。真遊はシャイなだけだから

「お、おおー つまり初対面の私と話すのが嬉し恥ずかしつすねー！」

絶対にツツ「むものか、と腕を組んで耐える真遊。その間にもあ

る事ない事言われるが、食事を見かけると凶暴化するような女とお近づきになるよりはマシである。

「でねでね……釣られないか、なら今度他人に対する好感度を弄つて、「嫌だあああ！」

いきなり黒くなつた美緒の言葉を思わず遮つてしまつ真遊。ニヤニヤ笑つてゐる実績と縁を見て、震だつたと氣づかされる。ちなみに武士子はポカーンとしていた。

「やだなー、私は真遊にそんな酷い事しないよー？」

「ど、どの口が……」

反論したいが言葉が見つからず、口をパクパクさせるだけ。その内に武士子に捕まり、何かもうなし崩しに挨拶することになつてしまつた。

適当に挨拶を済ませ、そのままの流れで武士子は一人の前に座つて注文の品を待つことにした。そして食つた。食つた。目の前の一人の食事を合わせた、さらに一倍は食べている。

「よく食べるな……」

「食べないと生き残れないッスからー。」

真遊の弦きにハンバーグを咀嚼しながら答え　　その言葉に自分自身首を捻る。

「あれえ？　『生き残れない』？　私、野生なんですかねえ？」

「確かに森の中に居ても違和感はないが……」

きちんと服を着て道具も使えるのに、野生味溢れる武土子だった。白米にがつつきながら会話する武土子に嫌気が差した真遊は、隣にヘルプを求める。

縁は苦笑するだけだったが、美緒は真遊の背に飛び乗って会話に割り込んだ。多分体勢に意味は無い。

「武土子、ちよつと食べるのやめてひらひら向こでー？」

美緒の声が響くが、武土子は無言の拒否　というか、食事に集中しすぎて聞こえていない。ムツとした美緒は再び手元で機械を作する。

「ロケットパンチ！」「だから勝手に飛ばすなあ！」

真遊の右手が飛んだ。しかし今度は武土子も黙つていない、キュピーンって感じで皿が光つて臨戦態勢に入る。

落ちた箸が皿に当たり、涼やかな音が響き渡る。その時には既に真遊の手が席に到達していたが、そこに武土子の姿は無い。足の力のみを使い、高く飛びあがつたのだ。ロケットパンチは遠隔操作でほぼ直角に追いかける、空中では回避できない。だが発想の転換、武土子はロケットパンチ自体を足場にして、さらに高く舞い上がった。そして

「いい加減にしなさい」

縁に止められた。それぞれ手首と足首を掴まれて、真遊が疲れたように溜め息を漏らす。

「あ、あう。でも先に仕掛けってきたのは美緒ひやんじゅあ……」

「武士子が言う事聞かないから……」

「お黙りなさい、まったく無駄な描写して……」

描写とか言っちゃうけど気にしてはいけないのである。

それぞれ口ケットパンチをきちんと戻し、椅子に座りなおし、食事を再開する。

「武士子、ちよっと食べるのやめにしてー？」

「はぐはぐがつがつむしゃむしゃ」

「待って美緒、話が先に進まないから」

ボタンに指を伸ばしかけた美緒を真遊が止める。そしてその間に緑が武士子の視線をそちらに移した、肉でひらひら誘つて。蝶々追つかけてる子供みたいな素敵シーンだが、対象が肉だとただ意地汚いだけだ。

そんな武士子の襟元に、真遊の背から体を乗り出した美緒が手の平を押し付けた。

「うひあ私の胸があ！ セクハラツ！？」

「いや、どっちかと云つと首筋だろ……」

「首マーニアー？」

もつツツコミたくなくて黙つてしまつ真遊。ツツコミ寄りの彼女でもこの相手は厳しいらしい。

真遊の体からテーブルをまたぐという無茶な体勢をしていた美緒が床に下り立つ。そのままあらぬ方（カメラ目線）を向いて口を開いた。

「説明しよう！ 今貼り付けたのは超小型化された『発信機』！ これで迷子になつても安心だぞ！」

「疲れてるんだからもうシッコまされないでくれ……」

真遊がシッコミ出来ない状態で、しかも緑は傍観。この場に妙な流れを止められる者は誰一人として居なかつた。

「おおー！ これさえあれば一人でうろついても大丈夫ッスね！」

「うん。変なところ行きそくなつたり迷子になつたりしたら、緑さんが来てくれるよー！」

「便利ッス感涙ッスー！」

* * *

電気もつけず、その部屋では一人の男が通話していた。

「……そうか、ではやはり

『うん……少なくとも僕は見てない』

アナザーに勤める友人、氷火への確認を終えて電話を切る。そこで鳥本は溜め息をついた。

武士子がこちらに来たのはアナザーのせいじゃない それがほ

ぼ確定した、氷火ならあんな目立つ奴を見逃すわけは無いだろ？
やはり、少し厄介かもしれない。

他の世界との繋がり方次第では対策も考えなければならない、と思案していると、控えめなノックの音が耳に届く。

「入れ」

返す言葉が届くが早いか、扉が開いて現れたのは縁。一礼して、鳥本の目の前まで音もなく歩く。

「仰られたとおり、美緒様の発信機を武士子様に付けました。本人は喜んでいましたが……やはり、警戒しておられるのですか？」

「ああ……とは言つても、アイツよりは世界の問題だがな」

武士子単体なら何も問題は無い。あの程度の事情ならば、ここではむしろ一般的過ぎるくらいだ。ただ、心配しているのは世界同士の繋がり。
リザルトキング
真の王。

世界によつては警戒しなければいけないかもしれないが、何せ武士子自身が記憶喪失なので元の世界が分からないし、もし武士子によつて何らかの事情が漏れていれば厄介なことになるかも知れない。

「とりあえず、あいつ本人についても警戒だけはしておくか。おーい、魔法王」

「魔法王様を呼ぶのですか？」

「そうだ、魔法王が一番適任だろ？しな

廊下から慌しい足音が響いてくる。しかし一人は慌てもせず、落ち着いてその人物の到着を待っていた。

そのままの勢いで扉が開かれ、一人の男が現れた。

「僕のツ！ 名前はツ！ アークだああああ！」

「ん？ ああ、お前はアークだな。どうした、そんなに急いで？」

息を切らして叫ぶ男 アークの顔を見て、鳥本は白々しく首を傾げた。

「鳥本さん……い、今誰か魔王と言いましたか？」

「いや、俺は聞いていないぞ。なあ、縁？」

「ええ、まつたくこれっぽちも聞こえておりませんよ？」

二人をジト目で睨むアークだが、この二人に対する言葉が見つからない。一番口が達者なコンビもあるわけだし。

溜め息をついてたつた今入ってきた扉から出て行こうとするアークだが、それを鳥本が呼び止める。

「いきなり飛び込んできてくれたのはとても奇遇でな、ちょっと頼みたい事がある……桜やフロア達の近くに居てやつてくれ。そして、その時は少し警戒をしておけ」

「……え、ええ。でも何で僕が？」

「お前が一番自然だというだけだよ、戦えない奴等を居るにはな^{あいつら}」

あくまで自然な態度の鳥本だが、それに対してもアーケの表情は探るような、何かに悩むような、複雑なものだった。

山上鳥本、異世界から跳ばされてきた自分たちと快く受け入れてくれた人物だが、なにかと謎が多い。フロアと自分の事情を話す程度ほどには信頼出来るが、それはあくまで鳥本自身の人柄についてだ。鳥本の裏にある事情などは、そういうものがあるのかも含めてまったく分かっていない。そもそもこの自分たちが寝起きしている場所 자체凄まじい、様々な人間や人間以外が共存している環境。

「今日も、飛びきり強烈な人を受け入れたみたいだしなあ……」

「ん？ アークお前、もうあいつに会ったのか？」

ええまあ、と頭痛を抑えるような仕草をして頷く。

「図書館に行こうとしている時にいきなり現れまして……なんか人引きずつてたし。本当、鳥本さんは器が広い……」

皮肉なのが本心なのか、溜め息を吐くアーカーに縁が苦笑した。

「まあ、警戒しろと言わればしますよ、フロアになにかあるのは僕としても嫌ですね」

そして今度こそアーカーは扉をくぐる。フロアか桜を探しに行くのだろう。

再び一人きりになつた所で、縁の声が悪戯っぽく響いた。

「鳥本様は、空香様を守つて差し上げればよろしいのでは？」

「……よく分からなー」と言つてないで、お前もやつやと通常業務に戻れ」

はいはい、どこか面白そうな声と共に縁も部屋から消える。残ったのは部屋の主ただ一人。

鳥本は一人、これから的问题について考えをめぐらせていた。

六

どうしてこうなったんだろう。

ムサシノ原

私はただ、言われたとおりに屋敷中を回っていただけだ。悪い事は……何故か畠にかかつていた男の人を引きずり出して引っ張りまわすぐらいしかやっていない。面白そうだったからついやつてしまつたが、皆さんの視線が「またやられてるのかー」みたいな感じだったからいつもの事なのだろう、南無。

その後は図書館に行く途中で男の人に挨拶して、到着してからは面白いお爺さんとお話しして、これから的生活順風満帆って気分だった筈だ。

転機としてはそこだつたのだろう。そのお爺さんの孫娘だという人に挨拶していると、その友達らしき二人とも出会つたのだ。当然挨拶をした。三人とも自分より少し年下ぐらいだろうけど、仲良くなれそうな気がした。

逃げるべきだつたのはここだつたのだろう。その三人は、私の身なりについて触れてきた。自分ではそれほど気にならなかつたんだけど、どうも服はいいくせに髪が乱れてるだとか肌が荒れてるだとか何とか。

そこで武士子は思案停止する。

「いいいいいやああああああ！」

そして叫んだ。

「……逃げちや、駄目」

「女の子だからねー」

「これぐらいはねー」

三人の女性 桜、空香、フロアが、尻餅をついて後ずさる武士子を包囲する。そしてじりじりとその包囲を縮めていく。武士子の顔に浮かぶのは、紛れもない恐怖。

三人がもう一歩踏み込もうとしたその時

「凄い声だつたけど……あ、ここに居たのか」

扉が開き、アークが部屋の中に踏み込んできた。

「あ、魔法王！ 今は女の子だけで集まってるんだからね」

「だから僕の名前は魔法王では無いとあれほど…………ん？ なんだ、わざわざの声は君だったのか？」

フロアとの恒例のやり取りの後、ちらりと部屋の隅を見遣る。縮こまっている武士子が居る地点だ。

「う、うう……わざわざおにーさん！ 助けてえー！」

武士子はどういえば、端に追い詰められている以外に変わったところは無い……筈だ。アーク自身、彼女の姿をよく見たわけでは無い

から変化があつても気づけて居ないだけかも知れないが。

「……何で、あの人と知り合い……？」

「ひあああああー？ さ、桜ちゃん超絶怖いッスよー！？」

桜が『何故か』武士子を睨んでいる光景を見て、今まで気付かなかつたアークもつい声を漏らして納得した。頭を抱えたからよく見えたのだが、後ろで髪を縛っている。

よく見ればフロアは乳液の容器のようなものを握っているし、空香も口紅を数本持っていた。さらに言つなら武士子の前髪が上げられてる、どうやら後ろで縛っているのはこれの為らしい。

どう考へても化粧だ。やつぱりなんでこいつこいつ状況なのか分からぬいが。

「ま、まあ状況は分からぬけど……嫌がってるんならやめてあげた方が……」

アークのおずおずとした制止に、三人は渋々といった顔で手を止める。

「……この人が、あんまりにも自分の容姿氣にしてないから

「だからと言つて、私はそういうの駄目なんですよ！ 鼻が利かなくなるッス！」

動物が、と言おうと思ったが女性の中に一人というアウェイ状態なので口を慎む事にするアーク。賢明である。

だが確かに、身だしなみ以前に体のほうが少し問題があるかも知れない。痩せきすというわけではなくむしろ筋肉はありそうなのだ

が、どうにも顔色も悪い気がする。不摂生、栄養不足、そんな感じだ。

「そういうの、興味ないッスから！」

と、アークが観察している内に話が付いたようだ。女性陣はそれ手に持った物を元の場所に戻している。安堵の溜め息が、武土子とアークの両方から漏れた。

武土子が立ち上がりて尻を払う様子を見届け、アークはフロアの方に向かう。

「ふう……助かつたッス……」

立ち上がりそのまま扉に向かおうとした武土子だが、ふと空香に話しかけられているのに気付いた。

「ねえ、何でそんなに化粧したくないの？」

それはある意味、自然な疑問なのかもしれない。確かに女性は化粧をする物だ、それがステータスになる。

ああ、だからこそ。

だからこそ、それは、自分が身に着けては

「……大体、貴女もしてないじゃないッスか」

「まあ、それはそうだけど……勧められて断る理由も無いし」

それは、「大層な身分だ。

ああ、憎い。

私は、私達は、生きるために

「……武士子」

「うひやー? ひやー!」

急に掛けられた声に飛び上がる武士子。声の主である桜としては驚かせるつもりはなかったのだが、元々が物静かだから、先ほどの武士子ならば気付かなくても仕方ない。

そう、先ほどの自分は何かおかしかった、でも何がおかしいのか分からぬ。武士子は自分の心を覗き込むように探るが、何の感情の片鱗も感じられなかつた。

「……その髪で出歩く氣?」

言われて髪に触れてみると、化粧の時に縛つた後ろ髪を解いていない事に気付いた。慌ててゴム紐に両手を向かわせるが、こんな作業は初めての経験だつた。上手くいかず、手間取つてしまつ。

「……そこに座つて」

「う……了解シス」

慣れているのか、手際良く進めて行く桜。ゴム紐を解き、髪を整えて

「ありがと……おおひ?」

そしてまた束ねて、再びゴム紐を通す。礼を言つて立ち上がりかけていた武士子は、驚いて再び腰を下ろした。

「な、何するんスかあー!」

これでは意味が無い、結局同じように戻しただけじゃないか。

だがそれにもかかわらず、空香は自分の顔を眺めるようにしてい る。遠くではフロアとアークも同様の動きをしているだろう。武士 子は自分の状況が分からず困感していると、桜が手鏡を手渡して きた。

そこに映っていたのは紛れも無く自分の顔だが、印象が大きく異 なっていた。今までは長すぎる髪が田線に少しかかつていて、そ れがすつきりしている。自分の顔はこういう顔だったのか、と再確 認させられた気分だ。

桜とお揃いの髪型 ポニーtailだ。化粧をしない最低限のお 洒落と言つことどうか、照れ臭さと嬉しさが入り混じつた、妙な 気持ちになつた。

「……ありがとう」

顔を伏せていても、優しい気配が伝わってくる。ここは良い所だ と思った、誰かが誰かに優しく出来る世界だと思った。

でも、だから。

自分は、こんな所に居るべきじゃなくて。

「うん、そっちの方が似合つてる」

社交辞令であるアークの言葉に、部屋のどこかから殺氣が噴出する。誰かが誰かに恋をして、誰かが誰かを好きになつて。

ああ、そんなの。

自分には、どうやっても望むべきじゃない。

「う、あ……？」

自分はなんだったんだろう。その答えが今なら見つかりそうな気がした。見つけてはいけない気がした。見つけなければいけない気がした。見つけるしかないようだつた。

血、だ。誰かを、殺したんだ。ああでも、誰を殺したんだ。何を殺したんだ？

「うあ、あ……？」

そうだ、そうだ。思い出そう。だつて、殺さなければいけないのだから。憎いんだ、だから自動的にこの体は動いてくれるんだ。そうに決まっているんだ。

頭の中がぐるぐる回る。心の中が鬱々巡る。
そんな中、扉が開かれた。

「な～んか騒がし～」

虹のように色が移り変わる髪の女の子、それが最後の引き金だつた。

ああ、思い出した。私が殺したのは『ソレ』なんだ。

頭の中で、歯車がかみ合う感触がした。過去の自分と今の自分が手を繋ぐ、ああ吐き気がする。何を平和に馴染んでいるんだ。

私は獣、道化者。頑張つて、結局何も手に入らなかつた道化者。何も手に入らなかつたからこそ、手元に残つた物がある。わあ、殺そう。殺して回ろう。だつて、だつてだつて

「金持ちは、嫌いだ」

とても慣れた動作で、袖から掌へすとんと小刀が滑り落ちる。わあ、殺戮だ。私が獣であるために。

* * *

原初風景は死体だつた。

誰かが殺したのだろう、自分は死体の持ち物だつたポーチを漁り、金目の物が無いか探し続けていた。

どうしてこんな場所に居るのかも分からぬ。ただこういう事をしなければこんな場所にすら居られないのが分かつていて。

結局、ポーチは既に漁られた後だつた。何も無いよりマシかと判断し、質屋に入れるためにポーチを持ち上げる。

「あれ、ガキが居んじゃん？」

その時だつた、声が聞こえたのは。罵声でも悲鳴でもない声を聞いたのは久しぶりで、それだけで体中が溶けそうなほどの安心が身を包む。

鬱陶しい髪を払つて見上げると、どうやら女性であるようだ。ここに居る大半の人間と違い、体のほとんどを覆うことが出来る服を着ているので、確信が持てないが。

「よつす、ここは酷い町だな。魔法発動に民が犠牲になるなんてありがちだけど、いやはや露骨なもんやねえ」

「あー……」

「お、喋れやんの？ 見たトコ五歳ぐらいやけど……あー、やっぱ教育つて大事なんやねえ」

女性はケラケラ笑い、死体を蹴つ飛ばした。「ふりふりと液体を撒き散らし、ころりころりと小さい物と大きい物が。シユールにすら見える、愉快に不快なその光景。

「お前、私の娘になる？ ていうかなれ。こんな臭くて汚い殺し方見てると、なんや腹立つわ」

「うー……」

訳が分からずに女性に抱きかかえられる。一つ分かつたのは、目の前のこれをしたのは自分だつて事。ああそうだ、ちょっと重いものをぶつければ、こんな大きいのでも簡単に死んでくれる。

「あー……」

とうあえずありがとひ、さよひなら、私の初めての人。ひがいしゃ

* * *

それは突然の事だつた。それに対応したアークの動きは寝められるべきものだらう。

武士子の手が、一番近くに居た桜の手首を掴む。いきなり現れたゲーム神に気をとられていたので誰もその光景に注目していない。そのまま桜が振り向くと、天高く振り上げられた刃が目に入つた。

「ひっ！」

喉が痙攣するような瞬間の悲鳴、その声が終わるかどうかという時に刃が落下を始める。その単純かつ手早い殺害を食い止めたのがアークだった。いつの間にか近づいていた彼が、逆の手首を取つてほぼ抱き込むようにして引き寄せたのだ。

「……一体、何の真似だ？」

問い掛ける声、一拍遅れて上がる悲鳴。女性を後ろに下がらせながら、アークは構えを取った。拳で殴る構えではなく、どこから斬りかかられても回避するための体勢。魔法王と異名通りの彼の力からすれば、この間合いは不利と言わざるを得ない。

武士子が顔をあげた。前髪が目を覆い隠していい事が逆に恐怖を引き立てる、その瞳はただ目標に向かうひたむきさだけが籠められていたのだから。狂気ではなく、錯乱ではなく、虚無ではなく、ただそこに目標があるから向かうといつもしろ前向きな思い。本能的に、寒気がした。

「何の真似って、殺しの真似じゃないですか」

ふつ、と。空気を巻き上げるような音が聞こえたような気がした。次の瞬間、武士子の体はアークの目の前にあつた。刃が十分に届く攻撃範囲内、ありえないほどの中動速度 ではない。走れば詰められる間合いだが、その過程を認識できなかつただけ。

「まあ、真似で済めばいいシスけど」

「くつ……ウインド・ボーム！」

掌に生み出した風の爆弾を、身をよじりながら強引に当てていく。だが武士子は再び視界から消えていた、魔法は虚しく空を切る。いや、今度は見えた。ただ、恐ろしい速度で屈んだだけ。人間の体とは思えぬバネと関節を駆使し、通常ではありえない軌道で移動・回避を実行している。

視線を下に向けると、確かにそこに武士子が居た。逆立ちのよう両手を地面につけて、そして体を丸めている。

「曲芸・飛鳥落」

とぶとりをおとす

次の瞬間、丸めた体が足を基点に競り上がる。打ち出された銃弾のように、足裏は的確にアークの顎を捉えた。脳が揺れる、体が仰け反る。

このままではいけない、と目を開いた時には既に眼前に武士子の姿は無い。目に映る物は、彼女の足先と小刀の鞘。そんなものに疑問を抱いている場合では無い。どれほどの跳躍力なのか、おそらく後ろ上空に居るであろう武士子に向き直りうつとするが、それは叶わなかつた。

「曲芸・地搖」

ちがゆれる

気づいた時には遅かつた。

鞘のそれぞれの端を両つま先が引っ掛け、それは彼女の下半身と合わせて四角形を形作る。そしてほぼ正方を描いていたそれは長方形へ、アークの首を絞める形となる。

そして頭を尻で押しつぶされながら落下。上下の衝撃と、喉への深刻的なダメージ。魔法で防御していたからまだ良かつたものの、下手をしたら死んでいたかも知れない。

否、おそらく確実に、死なないにしても致命傷だつただろう。これは、人を殺すための技だ。

「……おかしいッスね。どう受け身とつても頭蓋か胸骨かヤツてるはずッスけど……んー？まさか反応できずに首折られたとか間抜けなんじゃないッスよねー？女の子に顔向け出来ませんよ？」

げしげしと頭を蹴られているのが分かるが、その感覚すら鈍い。立ち上がろうとすれば立ち上がるかもしれないが、そうしたところでもともに戦うことは出来ないだろう。第一、この距離では立ち

上がる事すら許されそうにない。

「おこさんには優しかったので見逃します、といふか皆殺し出来る
ほど体もいませんし。……じゃ」

立ち去つていく足音、だが動けない。動けば確実にひからを狙つて、
今の状態では迎撃出来ない。

どうしようもなく、その足音を聞いていた。

* * *

「おかーさん」

森の中、自分の声は驚くほど響く。澄んだ空氣の中、他に聞こえるのは鳥の鳴き声や自分の足音だけ。

「んあ、ビーした？　お腹空いたん？」

頷いて返す、この頃の自分では単語文が精一杯だった。

「んー、まあせつかくの訓練なんやし、自分でなんかとつてき。火
は通してあげるさかい」

頷いて返す、『母』の言つ事は絶対だつた。彼女に従つて下さい
れば幸せな生活を送れるのだから。

だつて服を着る方法を教えてくれる。外に行けば『食べ物』がたくさん歩いていると教えてくれる。そして誰にも負けないための力を教えてくれる。

既に手に馴染んだナイフを握り締めた。森の獣は縦横無尽に動き
回るが、それもまた訓練だ。彼らに追いつき、屈服させるだけの力

が必要だった。逆に言えば、それさえあれば良かつた。

私の住む世界は、私が捨てられた世界はそういう場所だ。

「あんまり遠く行くなや。まだ死んだらあかんで」

頷いて返す、そして森の中へと走り出す。

ゆらゆらと、視界が揺れている気がした。それは多分、涙だった。
知らなかつた。顔を知つてゐる人間を痛めつけるのがそこまで
嫌なことだなんて、知らなかつた。

ああ気持ち悪い。他人の親切を踏みにじつて、あまつさえ恩人を
殺そうと思つてゐる自分が。

ああ気持ち悪い。今までの事を全部忘れて、平氣で普通に暮らそ
うと思つてゐた自分が。

「よお」

ふと、声が聞こえた。広い廊下に反響して、どこから聞こえたの
かも判然としない。

自分が廊下にいる事すら今氣付いた。いけない、思考を切り替え
なければ。

「誰ツスか？　どニツスか？」

心を冷やしながら問う。両手には既に抜き身の小刀をそれぞれ握
つてゐる。

「上だよ、上」

そう言つておきながら別方向から襲い掛かられる、といつ経験は何度もしてきた。周りに警戒しつつも、少しずつ目線を挙げていく。そしてそれが目に入つた時、不覚にも警戒が解けてしまった。もしそれが罠だつたらこれ以上なく効果的だつただろ？

なんか、天上から逆さ吊りにされている男がいた。

「……こ、今期最大のミステリー！」

「いや、お前があの三人追つかけるからだよ！ 突き飛ばされてたまたま罠に掛かつて、『まあ創輝だからいつか』みたいな対応されたんだぞ畜生！」

何でたまたま罠に掛かるんだろう、何で殺人鬼に追われるのに「まあいつか」なんだろう、疑問は尽きないが男の正体は思い出した。図書館への道すがら引っ張りまわした（物理的に）男だ。

「で、何なんだ？ お前、いきなり暴れたみたいだけど」

「どうも何も、私は殺すだけッスよ。そうしたいと思つんですから」

ふうん、と興味なさそうに青年が呟き その瞬間、雰囲気が変わる。殺氣でも敵意でもなく、ただ場数を踏んだ人間の持つ雰囲気。両手両足が使えない人間のものとは思えない威圧感。

またか、と思う。先ほどの戦闘でも不可解な力が使われた、今回もそれと同じような力が使えるんだろう。

武士子の常識の中で、『魔法』というのはやたら面倒臭いものだ。手間隙掛けた準備と、少しでもズレてはいけない配置が揃つて初めて効果を發揮する。あれは、武士子の知る現象ではない。

「まあ、通るなら好む」しりべ。今ならびひとも出来ないしな

「よく言ひますよ……」

素通りする事もできたが、何をしてくるのかも分からぬものを
背後に残しておくるも気持ちが悪い。

大丈夫、相手は動けない、一瞬で終わる、自分に言い聞かせて刃
を相手に向けた。

「なあ、お前、楽しかったか？」

不意に、先ほどより少しだけ優しい声が響いてきた。

その問は、今の自分にはとても辛い。確かに乐しかった、でもそ
れ以上に今までの自分が否定されているようで嫌だった。胃がぐる
ぐる回る、いつそあんな豪勢な食事なんて吐き出してしまおうか。

「その顔見てりや、まあなんとなく分かるよ。……スゲーだろ、こ
れが山上鳥本だ」

山上鳥本。彼が作った一つの世界。^{まゝなる世界}この世界は、彼女が知る世界
よりも穏やかで、樂しくて。だからこそ、怖くて。

また視界が揺れる、せっかく拭つたのにまた涙だ。今までの人生
であまり泣かなかつたツケとばかりに、嫌といつほど湧いてくる。

「ひぬせニッスよ…… われど、殺させてトセ」

涙をまた拭つ、このままじゃ袖を絞れるほどになりそうだなんて
思つてしまつ。幸せになるかもしけなかつた未来なんて思いたくな
い、もう刃を向けてしまつたんだ。

今度こそもう何も聞かない覚悟を決めて、再び刃を向けた。しか

し切つ先を向けた相手は不敵に笑みを浮かべている、せつせかからの臨戦態勢ではなく本当に余裕めいた笑みを。

「あー……残念だけど、時間切れだ。そりやそうか、ここまで派手に騒いで、あいつが来ないわけないよな」

不可解な言葉に武士子が首を傾げた途端　派手な音を立てて窓が割れた。体を両腕で守りながら枠を蹴り飛ばして廊下へと突入するそれは、女性だった。おそらく桜たち三人とそう変わらない歳だろう。片手に刀を持ち、立ち上がったその姿は威風堂々といつ言葉がよく似合う。

「強い気配はお前か……私と勝負しろ!」

「……はは、まだまだ面白い人が居るもんスね、こじま」

そして一人は構え、向かい合つ。

「どうでもいいけど、そろそろ誰か下ろしてくれないかなあ……」

そして男は、まだまだ逆を吊つ。

* * *

「ぐあー！　負けた！　免許皆伝やる、チクシヨー！」

その日、初めて母を倒した。良い食事と適度な運動、若い頃から体作りをしている母とは体力面で既に劣っているが、もちろん技術でも敵わなかつた。それを今、私は越えたのだ。

「おお……初めて勝つたツス」

「うんうん、ちゃんと言葉も話せるようになったし、剣も私より上やし、もう言つ事は無いな」

ぐしゃぐしゃと頭を撫でられ、ふらつく。正直、もう立っているのも辛い。早く眠りたい。

母と私の関係は良好だった。ここ 首都の外周部のスラム街では、生きる知恵を教える代わりに物を貢ぐ「子供」がほとんどだが、自分はそんな事もなく日々を送っていた。内周部に生きる人間がいう「愛情」というものは分からぬが、少なくとも「連帯感」のようなものは芽生えていた。

母はこの国どこかにある何かの店に召し抱えられた用心棒らしい。剣術だけで生き抜く部族の生まれで、そこで生活が嫌になつてこの国へ逃げてきたという事だ。自分が習つた剣術はその部族の物で、使う人間を選ぶがかなり強い、らしい。

「くあー！ やっぱ才能あるわお前。お前みたいなのを切り捨てるさかい、私はこの国の魔法が気に食わん」

「でも、仕方ないッスよ。私はたまたま母が欲しかった才能があるだけですし」

魔法は難しい、らしい。母に聞いた話だが、この国の魔法は「国民の名前」を使って王を守る魔法を成立させているらしい。子供が生まれれば政府から通達された名前を付け、予定の人数まで子供が揃わなければ他の地域や国から養子をとる。

自分たちスラム街の人間はその逆だ。予定には無い子供 無計画な出産 夫婦の愛情だか浮気だか無理矢理だか知らないが、期せずして増えてしまつた要らないもう一人。ここにいるのは大半が

そういう子供。名前すらもられず捨てられた子供。

言葉を覚える過程で母に借りた本には「名前こそが親が子に『え
る初めての贈り物』と書いてあった。ならば自分が這い出でてきたそ
れは、親では無いのだろう。

そんな風にずっと思っていた。関係のない他人だとしか思つてい
なかつた。特に関心もなく、生き抜く事だけを考えていたつもりだ
った。

「なあ、本当の親に会いたいか？」

私は多分、スラム街の中でもおかしな人間だつただろうけど。
本当に壊れたのは多分、これが原因だ。

* * *

たんたんたん、地面を叩く裸足の音。先ほどまでは草履を履いて
いたが、やはり素足の方が落ち着く。直接伝わる衝撃が体にしつく
り染み渡る。

しかし油断してばかりも居られない。自分と並走する少女がこち
らの隙をうかがっている。

先手必勝、減速を挟まずに右足で急制動。そして左手で右袖に入
れてあつた鞘を取り出し、横面を叩くように殴りつけた。急な動き
にも関わらず、それは刀の柄で防がれる　だが、予想通り。

「曲芸」

既に手首からは上に力は入っていない。鞘をそのまま手からわざ
と零し　敵からすればすり抜けられたような奇妙な感覚だろう

そのままくるりと一回転する勢いで鞘で狙つたのと同じ打点、柄
を蹴り付ける。そのままよろめいた相手の、次は手首を狙い　袖

から引き抜いた小刀を振り抜いた。

「あまだれいしきりがつ
兩石穿」

このまま腕を切り裂いて武器を落とせれば良し　と考えていたが、あれだけ揺さぶったにもかかわらずきちんと刀身を合わせた。金属の打ち合つ音、その後擦り合せるよつた音を立て、小刀は下へ流される。

強い、戦い慣れている。後遺症を残すほどの怪我を負いかねない攻防の後だというのに、その表情はむしろ充足に満ちていた。根つからの戦闘狂　斬るのが好きな快楽殺人者ではなく、このやり取りの空気を好む者。

「ふん、中々の手練と見える」

戦わないと死にますからね、と心の中だけで答え、相手の出方を見る。迂闊に動いてはこちらがやられるだろつ。

すぐさま攻撃に移るかと思つていたが、意外にも相手はすこし刀を引いた。

「私は天信　梨恵だ。お前の名を聞いておこう

名前。それは少し、残酷な言葉だ。

武士子、と口が動きかけたがそれを名乗る気はない、名乗つてはいけない。次に思いついたのは『本当の親に会いに行つた時に聞こえた、自分に付けられるはずだった名前』　これも却下。実感は無いし、そもそも自分の名前では無い。

「……鳴海なみみ」

迷った挙句、母の名字を借りた。戸籍も何も存在しない自分が、娘なのだから同じ名字を名乗ってもいいだろ？

「鳴海、か。鳴海、お前、なかなか人生を送ってきたようだな」

雑談のように軽い口調で、しかし次の瞬間には真っ直ぐに疾駆。反撃 不可能、基本的な能力では自分が劣っている。ならば、とギリギリまで腕から目を離さず、太刀筋の方向を観る。別の攻撃が来る事も考えられたが、致命的な斬撃を防ぐためなら多少の打撃は覚悟する。

横薙ぎ、そう認識した時には既に体が動いていた。ほぼ転ぶようにして足を折り畳む、両腕を支えに、すぐ体勢を整えられるような尻餅をつく。その選択は正解 横薙ぎの軌道が中途で変化し、脳天目掛けて振り下ろされた。

ギリギリで先ほどの鞘を蹴り上げ、小刀を握つていない方の腕で掴む。このような文字通り曲芸染みた真似が出来るのも母の剣術「曲芸」のおかげだ。

刃こぼれを恐れたのか、このまま押し合いの勝負になるのが好ましくなかつたのか 梨恵は刃を寸前で止めた。真正面から真剣な顔で見つめあう。お互いの目を覗き込み合う。

「……やはりな。お前の目、簡単に人を斬れる目だ」

ぽつりと、非難も哀れみ込められない透明な声が響いた。

嬉々とした戦闘の空気を纏つたまま、今にも笑い出さんばかりの顔で。

「ええ、まあ。何人殺したか覚えてないツスけど」

弁解とも開き直りとも取れない透明な声が返された。

ただ目標に向かおうとする前向きで、無謀で邪氣のない殺意の瞳を輝かせて。

だがそれでこそ、とばかりに梨恵の口が本当に笑みの形を作る。そのまま急に後ろに飛び退いて距離をとり再接近。急な動きで見切れない。無謀だと分かつていつも小刀を前へと突き出した。

切つ先が胸へと迫ると思った瞬間、手に重い響き 小刀を弾き飛ばされる。信じられない、刺突の勢いを持つ刃を、拳で払いのけた。

「 っ！」

その弾かれた勢いのまま真横へ飛び退く。梨恵の刀が空を切るのを横目で見つつ、武士子は頭から飛び込むようにして地面を転がった。そのまま地に頭を付けた逆立ち未満の体勢。足音で間合いを計り、そして腕を解き放った。

「はあ！」

「ひづとつをおじす
飛鳥落」！

既に振り下ろされていた刀が肩口を削る。貫けどばかりに放った蹴りが胸元に突き込まれる。肉を切らせて骨を絶つ とはいかなが、体勢は十分すぎるほど崩せた。背中から倒れ込むしかない無様な体勢で、梨恵の刀を持っていないほうの手首を掴む。相手と一緒に倒れこめばよし、自分が体勢を立て直せればそれもよし そのまま手首を全力で引っ張る。

「くつ
」

自分の体を支えに利用されていると分かつてもどうしようもない

梨恵。そして武士子はそのまま一回転、梨恵の体勢を崩しながら両足を地に着けた。

今度こそかわしもいなしも出来ないだろう、とほぼ確信を込めて鞘で顔面を狙った。一度でも隙を作れば、そこから致命傷への流れを作る。それが「曲芸」の真骨頂。一度でもこちらのペースに踏み込んだ時点で相手は終わり。今までそうだった、今回もそうだ。そうだ、と思っていた。

「お　おおおおおお！」

だが、急に寒気　迫る死の感覚。口クに確認もせずに身をよじる　空間ごと切り裂いたかと錯覚する、裂帛の切り上げ　冷や汗が流れ出す、あと数瞬でも行動が遅れれば、数ミリでも距離が違えば、半身を持つていかれていたという確信。

体勢が崩れたのはフェイクかと考えたが、違う。ただ、闘争心と鍛錬の成せる気合の一撃。今までに戦ってきた人間とも獸とも格が違う。

頭に思考が浮かんでいく中、急に髪が解かれた。

「あ……」

あの攻防でゴム紐が千切れた。それだけだ。ただ、それだけの事実。

自分を女性と見てくれて、身なりを考えてくれた人　桜とお揃いの、髪型。

何故か、大事な糸が、音立てて切れた気がした。

崩れ落ちそうになる。気を張つて耐えた。一度耐えたらどうでもよくなつた。世界が形を変える。元の形に戻る。ああなんだそうか、何を躊躇つていたんだ。こんな所で言い訳じみた時間稼ぎなんて、する必要ないじゃないか。さあ　目的を果たそう。

「……どうした？」

律儀にも足を止めて待っていた梨恵に微笑む。自然に、いつも通りに。いつも通りの　凄惨な笑みを湛えて。

「いえ、今決着をつけるのは勿体無いかと思つたんスよ。もつと修行してきますから、その時にお相手してもらえないかなあと」

嘘ではない　いつかぶつ殺してやる、そういう気持ちが心の中に渦巻いている。でも今はそれよりも大きな憎悪が先に居座つていた。

「本当だらうな？」

「“獲物”を取り逃すほど人間染みてないッスから、私

ふん、と一つ鼻を鳴らして、梨恵は刀を鞘に納めた。田先の利益に飛びつくだけの人間じゃなくてよかつた、と心の底から安堵する。向こうが殺す気ではなかつたとはい、あのままではどうなついたかわからぬ。

彼女が立ち去るのを見送り、そして武士子は探す事にした。目標、標的、敵。自分の敵。

「金持ちは、嫌いだ」

ポツリと呟いた。今の自分の、そしてこれからの中存在意義を。
さあ　山上鳥本を殺そう。

口から荒い息が漏れていた。激しい運動のせい、つてわけじゃない。確かに少しばかり動いたけど、このぐらいで息切れするほどやつじゃない。

私はこの時、人を殺した。

母から聞いた話だつた、自分の生みの両親の居場所。裏づけも取つた後に教えてくれた、自分でも彼ら本人の口から聞き出した。

先ほど白状した父親の口は、もう首くびごと存在しなかつた。一番協力的だつたから一番楽に殺してあげた。生みの母と、そして私の代わりに食卓に付いていたとても幸せそうな間抜け面は家に残してきた。父親の片足を握り締めて引きずりながら、うるさく喚いていた父の言葉を反芻する。

ああお前は私達が捨てた娘だな目元があいつによく似ているよ後悔しているんだ私はやりたくないなかつたんだ上からの命令なんだ許してくれ許してくれいやすまない許してくれなんて言わない妻だけは生かしてやってくれどんな罰でも私が引き受けるからああどうか妻だけは。

押し入り強盗になつたような気分のまま、鬱々と殺した。

世界が変わると信じていた。でも何もかわらなかつた。イライラする。

育ての母は、娘が欲しかつただけらしかつた。代金は商品自身の命、買い取つて得たのは充実した指導の時間。ああ、信じたくないつた。私はあの人わたしの、暇潰しの道具。それもあの人を超えた時点で終わり、課程終了。私はもう、要らない子。芽生えていた連帯感の糸が断ち切られる。

頑張ろうと思つた。今までも私の体は生きていけるけど、私の心は生きてくれない。何かを変えないといけない。生みの親を殺しても、心はあまり変わらなかつた。大した動搖もなかつた。根本から殺さないといけない。そう、思つた。

* * *

その前向きな殺意にもはや曇りはなかつた。山上鳥本を見つけ出して殺すといつ武士子の心には一点の嘘もなかつた。だから背後からのいきなりの声にも驚かなかつた。

「元気そうじやないか」

まじめ事無き標的の声　聞いた瞬間、両手でそれぞれ鞘を握っている。振り向いて確認すると、そこには確かに鳥本がいた。出合つた頃とまったく変わらない立ち姿で。

「……自分から出てくれたのは便利ツスケビ、どうして私の場所が……」

「忘れたのか？　それだよ」

自分の首筋を親指で指した。そうして気付く、自分に付けられた発信機。

「ああ…………いや、事情も何もかも全部分かつていいぐく？」

「随分と派手にやつてこるようじやないか。家主として、一言べらりいは言つておこうとな」

「うですか、と呟き。心を無心の殺意を満たして。すつと、自然な動きで鞆を突き出した。

「こきなりか」

そんな凶悪な行動に対して、むしろ子供の悪戯に苦笑するような軽さ。突きをいなすように手を差し出す鳥本 やはり、ただ金持ちというだけじゃない。戦いの心得がある。

そのまま鞘から力を抜き、肩からぶつかりそして小刀を振るう一連の動作 曲芸の技の一つ、「雨石穿」の実行を思い浮かべた。初見で見切れるほど簡単な動きのつもりもない。

だが、鳥本の手は予測していたように鞘を無視 そして武士子の手首を掴む。力を抜くはずだったタイミングで完全に掴み取られ、片腕の自由を奪われた。

「 ッ！」

「ふん、何もかも全部分かつてこゝへ、と訊ねたのはお前だらう。ああ分かっているぞ」

掴んだ腕を引き寄せ、足を引っ掛け やられた、会話に隙を取られている内に転ばされる。

「お前がどういう戦い方をしているか、などはな。随分と変則的かつ通常の人間には実行できない

動きだが 十分に普通の範疇だ。簡単に対応できる

つまりなそうな、雑務を片付けるような、そんな手つき、目。ああ、畜生 滅ぼされている。

その事実が許せなかつた、がむしゃらに地に手を付け、その場で逆立ち。肩に足を引っ掛けた、そのまま前のめりに引き倒そうとその動きを開始しようとした所で鳥本は肩に掛けられた方と逆の足を掴む。引きずり倒す為の動作は、どういう力が働いたのかダンスでも踊るような位置の交換に。

そのまま黙つているわけにもいかない 逆立ちの体勢は急所を

晒しすぎる　と思い片手だけに加重を掛けて相手の出方次第で体勢をすぐに変えられるように。しかしその瞬間、支えにした方の腕を足で払われる　倒れる　まさか　曲芸を使つてきた、相手の体勢を崩してきた自分が逆に？

「ぐ……う」

初めて相手の前で倒れ伏す。焦り、情けなさ、嫌な感情が波になつて押し寄せてくる。

「どうだ、少しばかり着く気になつたか？」

高圧的な物言い　自分が優位に立つていて自覚している声音
それが事実だと分かつてはいても、神経が焼け付くほど憎しみを感じる。ああ、そうだ、これは憎しみだ。

「金持ちは、嫌いだ」

ぱつり、と自然と口から言葉が漏れた。

「嫌いだ……！」

堰を切つたように感情が外へ漏れ出す。俯いて倒れているおかげで顔を見られていなことが幸いだとすら思えた。

「どうして嫌いなんだ？」

「私を不幸にしたのは金だ！　私が親に捨てられたのは金のせいだ！　もう嫌だ、お前らの傲慢で世界の形が変わるなんて嫌だ！
お前ら金持ちのせいで、私の人生が歪められたから、だから嫌いだ

つて言つてゐるんだ！」

質問に答えるとこりょうとは、ただの叫び。空に向かつて吠える顔を晒す。今の自分はどうこう顔をしていいだらうかなんて考えている余裕は無い。

「嘘だな」

たつた一言で、叫んだ言葉の全てが否定された。

「な……つー」

「お前、気付いていないかもしれないがな　」

逆光で鳥本の顔が見えない　だが声は態度を変えないまま、耳に届き続ける。

「その顔は必死なだけだ。憎しみなんて、ビームもない」

自分の顔を見ることが出来ないのがもじかしかった。涙が出そうになつて、心の中で三つ田の糸が千切れだ。

一つ田は母への未練。二つ田はこの優しい世界への未練。そして三つ田は　少しの間守り続けた自分への未練。

口が勝手に動き出した、さきほどと同じように。

「子供を、殺したんです」

「ああ」

「小さくて可愛かったんですね。まだ刃物が何かしらなごぐらこの子

だつたんです

「ああ」

「お姉ちゃん何してるので無邪氣で、でも、私、思わず……知らなかつたんです。子供が居るなんて」

武士子の話を聞きながら、鳥本自身も自らの能力 読心瞳スコープアイズで彼女の心を覗き込んでいた。

彼女の名前と居場所を掠め取つた『娘』の生みの両親 それは国の名士である魔法使いだつた。国の魔法の維持を引き受け、膨大な金と地位を得た彼らの家の一つに武士子は踏み込んだ。二人を殺して、それでも何も変わらなかつた。失望して、そして動くモノを殺してしまつた。それは女の子だつた。

武士子の家庭のように余所へ預けた子供がたまたま来ていたのだろう。とにかく、そのせいで武士子に初めての罪悪感が生まれた。恐らく敵意のないあどけないものだつたからだろうが、それは武士子自身も正しく把握は出来ていなかつた。

だが一つ確かな事があつた。罪悪感を認めてしまえば、今まで無頓着に殺し続けてきた全ての命に責任を感じてしまつといふこと。耐えられなかつた。今さらの罪悪感に、これからどうしていいのかなんて分からなかつた。

だからそれは一つの言い訳に帰結する 金持ちは嫌いだ。

金持ちが嫌いだから、何の恨みもない女の子を殺した。いつもと違うのは爽快感。ほら、自分はこんんにも満ち足りている！ そういう言い訳しなければ生きていけない自業自得があつた。

「そして魔法使いを殺したことにより魔法が暴発 異世界へ跳ばされた、か」

記憶が消えたのはその時のショックか、はたまた暴走した魔法が彼女の痛みを消したのか。その世界の魔法という技術に通じていな鳥本には分からないが、そこは大した問題では無い。

問題は、彼女の心の決着のつけ方。

「……一つ、聞かせて欲しいッス

鳥本と武士子が向かい合つ。もはや前向きな殺意は宿らない虚ろな瞳で、問いを向ける武士子。

「何で私を気にかけてくれるんスか？ 別にそんな義理はありませんよね？」

鳥本は小馬鹿にしたような笑みと共に答えを返す。

「面白くないからだよ、いきなり自分が選んだ人間が消えるのはな。お前は俺に拾われたんだ、ならば少しばん恩を返そうとは思わないか？」

「私みたいな殺人鬼でもですか？ こんな平和な日常に私なんかが

」

武士子、困惑。鳥本、平然。両者それぞれの立ち様。

「日常だよ、お前は自分の事を特別だと思っているみたいだがな。この程度では特別とは言えないぞ、元・殺人鬼 ふん、なかなか面白い個性じゃないか」

全てを悟ったようなその台詞 特別じゃない、元・殺人鬼

それら全てが魅力的に見えてくる。その選択肢しか残されていない

ような、しかしその道はとてつもなく幸せだと思つてしまつ。自分の存在が個性にしかならない日常へ 奇跡的に素敵な世界へ。

だが、武士子の手の中にはもう一つの選択肢があった。全てを償わなくともいい方法。

「……まだ、間に合います。私の心は、間に合います」

すらりと、刀を抜き放つた。片手に一本のみ、鞘は持たず。曲芸における戦闘スタイルとはかけ離れた姿勢で。

「金持ちは、嫌いだ」

そう、それは鳥本によつて暴かれた本心を忘れ去り、再び殺戮の道を行く事。この世界で生きていくがどうかは分からぬが、少なくとも最後の瞬間まで自分でいられる。

そんな武士子を見て、鳥本も構えた。

「それがお前の選択か……仕方ないな」

再び瞳に前向きな殺意を宿らせる武士子。静かな面持ちのまま、不動に構え続ける鳥本。

その勝負に技術も何も存在しなかつた。ただ、力と読みの勝負正面からのぶつかり合い。

リーチでは有利な武士子、だが逆に軌道が読まれやすい。だがそれでも構わず、刀を振りかぶる。今までで最大の速さ、正確さ、威力を込める勢いでの渾身の突きを顔面に向かつて放つ。捉えた歓喜と一抹の寂しさを感じる間もなく腕は伸びきつた。

だが、頭蓋が砕けてもいなければ顔面を貫いてもいない 脅威の動体視力、それすらも予測済みという風な頬の傷。掠めて終わり、腕を引く暇は無い。体の他の部位も突きの勢いに持つていかれてい

る。防衛すら出来ない。

そんな武士子の懷にもぐりこんだ鳥本。腕は、武士子の腹部を的確に捉えていた。

「霸王の、鉄槌……」

鳥本の眩きは彼女には聞こえない。体の内側を的確に、致命傷を負わさぬように破壊された彼女の意識は既に失われていた。

＊＊＊

空が光っていた。星が落ちてきたんじやないかって思うほど、綺麗で眩しい光が目を焼いていく。

私は獣、道化者。頑張つて、結局何も手に入らなかつた道化者。何でこんな事をやりたかったのか分からぬ、でもやり遂げた。でもでも、世界は何も変わらない。

腹が立つ、憎んでいる。自分になのか他人になのか分からぬ。ああ、このままだとまた何か殺してしまいそう。

違う。

私は何かを手に入れた。世界は変わった。憎んでいない、澄んでいる。だからもう誰も殺さなくていい。

私は獣で、道化者かもしれないけれど、手に入れたものはあるはずだ。

＊＊＊

「私は……」

ふと、武士子は自分が眠っていた事に気づいた。自分の咳きで自分を起こしてしまったかのような錯覚 暖昧な頭のまま上半身を起こす。ベッドだった。

「起きたね、ミル」

「そーだね」

唐突に声が聞こえた 自分のベッドの横。人が座ってる、だが人にしては少し影がおかしいような。

考える間もなく、手紙を手渡された。そしてそのまま武士子には一言もかけずに退室していく。不思議な人だな、と思いながらも受け取った手紙に意識を奪われる。

律儀な封筒を開封 中身は折り畳まれた一枚の紙。差出人は山上鳥本。

「 ッ！」

途端、今まで起きた事の全てを思い出す。脳が覚醒する。
殺さなければ ああでも負けてしまった どうすればいい
果たせなかつた自分は 死ねばいいのか 死ぬ 死ぬ
ああなんにしても刃物がない 調達しないと 。
頭がおかしくなつたようにつらつらと考えを続ける。この胸に到来する、「罪悪感」を残らず殺してしまう方法を。ああ、死ぬしかない。

「死にたくない」

自分の口から言葉が漏れた。思わぬ言葉、思つてもいない言葉、もしくは思つっていても抑圧された本心。

死ぬのは嫌だ。育ての母に叩き込まれた流儀が悲鳴を上げる生き続けられるつちは生き続ける　『まだ死んだらあかん』。
死ねない、じゃあ苦しみ続けるという事か。殺したきた人間の顔を思い浮かべつつ苦しみ続けるというのか。嫌だ、それが嫌でああ畜生、天真爛漫な笑顔がまぶたに浮かぶ。そのまま千切れとんだ首が頭に浮かぶ。

涙が手紙を塗り潰し、自然とそちらを見てしまった。

『今日からここがお前の部屋だ』

まったく何の疑いもない断定口調　傲慢で頼もしい彼の流儀。涙で滲む。畜生、短い文章なのにまだ読みきれない。

次の二文、最後の一文。

『俺はお前の命を一度拾つた。その命は誰かを救う為に、許す為に使え。まずは、一番身近な誰かを』

涙が出た。涙が止まらない。彼も、武士子が死ぬ事を許さない。涙が出た。嬉しいのか悲しいのかわからない涙が。

「あ……はは。私の、生き死には、旦那のものなんだ……これじゃ、勝手に、死ねないや……」

嗚咽が混じり、上手く独り言す、言えない。

一番身近な誰かを　『自分を救え、許せ』。難しい事を言う人だ、今はそれで悩んでいるのに。

信じようと思った、自分を許せる時が　罪悪感の全てが消え去る時が来るのを。それがいい事なのか悪い事なのかは分からぬけれど。自分の望む方へ少しでも近づけるように。

「うん……」

刀の飾り布を解いて、髪を束ねた。不器用で、不恰好な、それでも自分の最大のお洒落 ポーテール。

まずは皆に謝らないと。ベッドから立ち上がりながら計画を立てる。美緒と真遊に会つて話そう、縁に礼を言おう、梨恵に戦つてもらおう。フロアやアーク、桜や空香に謝りう。さつきの人の正体を聞いてみよう。鳥本にどんな顔して会うか考えよう。引きずり回した人は、まあいいや！

未来の事を考えながら、武士子は一步を踏み出した。自分で決めた、自分の適當極まりない名前に誇りを持ちながら。この他愛ない日常をまつといつする為に。

(後書き)

いつも、皆様の頭の片隅に存在しているかなあどうかなあしていればいいなあ、ハニ・タンです。

さて、今回は「金持ちはファンタジー！」の番外を企画でやらせて頂きました。

書いてみた感想としては「金ファンつて自由だなあ」って所です。僕が勝手に考えたオリキャラがきちんと適合しましたし。

オリキャラといえば、一応この「鳴海 武士子」は鳥本の反対によるように設定しています。どこが反対なのか、死ぬほど暇な時に考えて頂ければ微妙に暇が潰せます多分。

では、この物語が「金持ちはファンタジー」の原作を読んでいる方に楽しんで頂ける事を祈つて！ そして作者の正体不明さんに敬意を表して！ 後書きを終わります！

……これ、壮大な「キャラ募集企画」への応募だよなあ、なんて心の片隅で思つてたりします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0490j/>

金ファン番外～それもまた他愛無い日常～

2010年10月21日22時56分発行